

幕末明治の写真師列伝 第四十回 内田九一 その五

この前田玄造(注1)はその後も写真撮影を続けていたのだが、内田九一は舎蜜試験所で雑用を手伝ううちに写真に魅せられ、何とかこの写真術を前田玄造から教えて貰いたいと松本良順に願った。松本もそういうことなら、内田九一を、ひとつ写真を稼業にするように仕込んでみよう、前田玄造に頼んでみることにした。前田玄造もそれを快く聞いて、早速内田九一を自分の助手として使いながら、いろいろと薬品の調合など写真術について教えてやることにした。ところが内田九一はいわゆる天性であったのか、わずか一、二ヶ月ほどで師匠の前田玄造を凌ぐほどの写真を撮影できるようになったという。

こういう逸話からも後年の内田九一の写真についての技術、才能の高さが窺える。また内田九一は、この時やはりポンペの下で学んでいた津藤堂藩の堀江鋏次郎(注2)からも薬学を教えられていたようだ。この万延元年(1860)頃、内田九一はオランダ人が競売した写真薬品を買い、更にフランス人写真師ロシェからも写真を習ったといわれる。その後上野彦馬にも師事し写真術に熟達したという。『幕末の武家』の「松本蘭時」の項には、以下のように記述されている。

「私は九一を訓練所の小使に使っておったが、十六の時、金子三十両をやって、その使い途を見たが、蘭人の競売で、一と抱えもありそうな箱を二つ買って来た。開けてみたら、薬品が一杯はいってあって、これはみな写真の薬であった。これがそもそも九一が写真術に志す端緒である。それから九一は、その後来た英国人について写真術を修めた。同じ頃、或いはこれより少し前かに、長崎で代々時計遠目鏡の鑑定御用を勤める上野新之丞という者があって、これも写真術を習うた。その後たしか九一と二人で、長崎で開業したと思う。」

この頃の内田九一の様子を示すものとして、後年になるが永見徳太郎が「長崎談叢」(長崎史談会編、昭和9年6月、第14編)の「写真界に於ける上野彦馬の位置」という論考の一節がある。以下がそうである。

「(前略) 文久二年(一八六二)の開業当時、いの一歩に入門したのが内田九一である。彼は利にさといばかりでなく、何事にも才能を現はした。先生の彦馬に比べても決して劣らぬ技術となった。仲善の幸馬も兄に見劣りするような写真術ではなかった。内田は材料を外国人から買っては、師に売りつける。新しい物でさへあれば、彦馬はどんな高いのでもお金を惜しまなかった。内田は清元が得意で、丸山廓を泳ぎまわっては、色男ぶりを発揮し、女郎に洋装をさせては、写真器を擔いで郊外に行っては、撮影したりして嬉んで居たが、終に幸馬をも茶屋酒に親しませたりしたので、師の気嫌もよくない。(後略)」

上野彦馬との関係は微妙であったようだ。それは内

田九一自身が後年、上野彦馬の門下と人にみなされることに反発していたことからわかる。前述の、内田九一の弟子、飯岡仙之助が内田九一から聞き書きにより記した『故内田九一経歴』によれば、内田九一は上野彦馬と「相与ニ切磋ス」と述べ、上野彦馬との師弟関係を曖昧にしている。また、上野彦馬の方も「東洋日の出新聞」の記者、鈴木天眼(注3)に内田九一について聞かれた際、そっけなかったという。

文久3年(1863)頃の内田九一は数え年で弱冠二十の青年ながら、長崎で薬種商として出島・大浦でオランダ商人と交わり、抜け目なく稼ぎ始めていたようである。しかも習い覚えた清元が得意で、丸山廓で遊びまわっては、遊女とも懇ろになり、そんな女郎たちに洋装をさせて引き連れ、写真器を擔いで郊外に行き、撮影して嬉んで居たようだ。もしかしたらこの頃の内田九一は、師匠とは言いながら上野彦馬にオランダ人が仕入れた写真薬品を言い値で売りつけて、けっこう稼いで丸山で遊んでいたのだろう。そして、最初は薬種商としての内田家を再興しようと考えていたのかもしれないが、だんだん流行ってゆく上野彦馬の写真館を眺めているうちに、自分でも写真館を開業してみようと考え始めていたのではないだろうか。しかし、元治元年(1864)ここ長崎では、営業写真館としては上野写真館にもはや敵う所は無かったである。

(森重和雄)

注1：前田玄造

福岡藩士、名は友、字何信、三前と號した藩命により長崎留学中、松本良順及外人に師事して写真術を学び、内田九一を助手として研究した。梅本貞雄編『日本写真界の物故功労者顕彰録』(日本写真協会、昭和27年)より

注2：堀江鋏次郎

天保2年9月2日江戸染井邸生。津藩藤堂公家臣、長崎留学中、上野彦馬と写真術の共同研究に當った。藩公の援助をうけ新鏡玉を購入し、上野彦馬と共に江戸に至り諸公を撮影した。津藩の蘭学教頭となる。諱忠雍、字公肅、號松澤、後宗平と改めた。遺稿「日行集」あり。慶応2年10月28日逝去、享年46、盡忠院通傳三餘居士、後嗣堀江忠重は明治24年1月3日逝去した。梅本貞雄編『日本写真界の物故功労者顕彰録』(日本写真協会、昭和27年)より

注3：鈴木天眼

『東洋日の出新聞』の記者。「日本写真の起源」を連載した。